

# 幼児の心に帰れ

老子的思想の立場から

中国古代の思想家老子は、道義の衰えた春秋戦国の世に出ながら、かえって学問や道徳を否定し、自然に帰れと説いた。世間の認める学問や道徳は、本質からはなれた見せかけの飾りにすぎないと考えたからである。

賢者や聖人になろうとはいけない。

学問を捨てよ、道徳を棄てよ、

そして、素朴になれ、自然に帰れ、

そこに、本ものの純粋な心が生まれる。

これが、老子の根本をなす思想である。教育観もここから窺えよう。

さて、一般に、学問や道徳は、人間が人間らしく生きていくために、どうしても必要なものだと思われている。それなのに、なぜ老子は「学問を捨てよ、道徳を棄てよ」というのであろうか。それは、欲望にとらわれてする学問や道徳は、本質を見失っているからである。賢者になろう、聖人になろうとする学問や道徳は、欲望におおわれてその本質を見失っているのである。本質を見失った学問は、いくら積み上げてても瓦礫がれきの山でそこには真理はなく、本質を見失った道徳は、いくら履かみ行っても偽りの飾りでそこに真実の姿はない。われわれは、いま、この瓦礫の山をとり除き、偽りの飾りをとり払って、そこから学問や道徳の本質に迫らなければならぬのである。



昭和58年 13回生クラス会（衆望）

こうして、捨て得る限りの一切を放棄してのち、最後に残るものは何か。それは、生まれたままの裸の人間——幼児のような純粹さであろう。幼児の、その寡欲にして素朴、無為にして自然な純粹さを老子は尊ぶのである。現代社会に生きるわれわれも、この老子の思想的立場に立ちかえって、静かに自ずからを考えてみる必要があるのではなからうか。人間が、どんなに学問を積み道徳を履み行っても、それが、地位や名譽や財産のためにしたのであれば、それは、とるに足りない瓦礫に等しく、見せかけの飾りでしかないのである。いまこそわれわれは、地位や名譽や財産のためにする学問や道徳をやめなければならない。そうして、いままで誤って積み上げた

瓦礫の山や見せかけの飾りをとり除かなければならないのである。この瓦礫をとり除き見せかけの飾りを払い捨てた裸の人間——幼児のような純粹な心に帰ることこそが、現代社会に生きる人間にとって必要なのである。

幼児教育に携わろうとする者は、ここに意を用いなければならないと思う。なぜなら、純粹な心は、より純粹な心の持ち主でなければ教え導くことができないからである。地位や名譽や財産のために積んだ学問や道徳を身につけた大人では、決して幼児の純粹性を育てることはできないのである。大切なことは何か。それは、何ものにもとらわれない本ものの純粹な心に帰って、幼児の内なる心を育てることである。それが、自然の理にかなった教えの道だと思うのである。